

『稲生物怪録』と三次

富士原 彩夏

(堀田 穰ゼミ)

はじめに

広島県三次市を舞台とした『稲生物怪録』は、近代では、泉鏡花、巖谷小波などの文学者が注目し、近世においては、冥界に関心を持っていた平田篤胤が、数多く存在していた『稲生物怪録』諸本の校合をした。そのため、国学、国文学の領域では、特に平田篤胤についての研究において、『稲生物怪録』にも触れられていることが多い。

『稲生物怪録』についての研究の傾向は、(1)『稲生物怪録』諸本の書誌学的研究⁽¹⁾、(2)平田篤胤の業績の一部としての研究⁽²⁾、(3)実在した稲生武太夫の系譜研究⁽³⁾等とおよそ3つにまとめられるが、物語としての『稲生物怪録』の内容を検討し、舞台である三次との関係を述べている研究は、管見によると倉本四朗の『妖怪の肖像—稲生武太夫冒険絵巻—』⁽⁴⁾しかない。

また、『三次市史』において、『稲生物怪録』の成立背景について以下のように述べている。

「まず社会的背景をみると、武士たちが天下太平の世に慣れ、とくに三次藩廃絶後も三次に残っていた武士たちが遊惰だ、無気力に日々を過ごしていることへの警鐘の意図があったのではないか。(中略)

さらに稲生武太夫自身に引き寄せて、この物語の発想の源を考えて見ると、一五歳の時の経験という点が注目される。一五歳といえは武士身分では元服であり庶民も成年式の年齢である。各地の民俗行事に、試練を与えそれに耐えた者を一人前の大人として扱う胆力試練の通過儀礼がある。武太夫自身にもこのような発想があったのではなからうか。幼少にして両親に死別し、養父に育てられるという生育環境にあっては、強い自立心が常に要請され、平太郎にとって「一五歳」は特別に

大きな意義をもっていたに違いないと思われる」(三次市史編集委員会 2004)

このような2つの視点があるので、三次藩城下町の土地の特異性などを留意しつつ、『稲生物怪録』における怪異全体を通してなぜ三次で起こったのかを論じていく。

第1章 『稲生物怪録』の概要

第1節 『稲生物怪録』の諸本の系統

杉本好伸⁽⁵⁾によると、『稲生物怪録』の諸本は、数多くあり、大きく分けて2つに分けられる。

1つは、文章中心のものである。これは、①知人の「聞き書き」形式のもの、②本人の「書き留め」形式のもの、③平田篤胤及び門下生らが①②の2系統を中心に「校合整理」したものである。①の代表となるのが柏本である。この柏本は、稲生平太郎の知人である柏正甫が稲生平太郎から聞いた話を書き留めたものである。この柏本においても様々な系統があるが、これについては、「第三節 平田本と柏本」にて詳しく述べていきたい。②は、稲生平太郎が書いたとされる『三次実録物語』、ただ一つである。③は、平田本とも呼ばれ、『稲生物怪録』に興味を持った平田篤胤が校合したものである。この平田本には、挿絵が入っている。

2つ目は、絵が中心となるものである。これは、視覚で訴えるものであり、文章では伝えられなかった情報を絵で表現している。そのため、読んでいる人々も怪異を想像しやすかったのではないだろうか。この絵が中心となるものは、絵本と絵巻がある。本論では、絵巻を中心として『稲生物怪録』をみていくため、絵巻について触れていきたい。絵巻のもっとも古いとされるのが堀田家所蔵の堀田家本『稲生物怪録絵巻』である。この堀田家本は、『三次実録物語』において共通点が多い。

そのため、成立年代が不明ではあるが、この『三次実録物語』を参考にしているのではないかと考えられる。以上の系統を図にしたものが図1である。



図1 稲生物怪録諸本系統図
(杉本好伸)「稲生物怪録について」p13より

第2節 平田本と柏本

繁原央によると、柏本とは、

「柏正甫が稲生武太夫から直接話を聞いて(天明三年(一七八三)の自序によると四回稲生から聞いたという)記録しておいたもの⁽⁶⁾を、寛政十一年(一七九九)夏四月の跋を書いた猗猗斎竹能という人が、披見し書写した。さらにそれを平田篤胤の朋友の吉田某が、竹能の親戚で、書写しておいたのを、篤胤が借りて、人に頼んで文化三年(一八〇六)に書写したと序文にある。それを文化八年(一八一―)五月の篤胤の後記によると、文化三年の書写本は文字の誤りや、結びのはっきりしないところがあったので、弟子の大野均和に校正させて新たに書写させたものをいう。」(繁原央 1995)

つまり、形式としていうと、柏本とは、柏正甫が聞き書きしたものに、柏正甫の自叙、猗猗斎竹能の跋、平田篤胤が書いた序文と後記、いずれかがあるものである。

その中で、平田本と言われているものは、「『平田篤胤全集』第三巻(明治四十四年九月、一致堂・平田学会・法文館書店)、『平田篤胤全集』第八巻(昭和六年十月、内外書籍)・『新修平田篤胤全集』第九巻(昭和五十一年十二月、名著出版)所収テキストの底本」(吉田麻子 1998)である。この平田本は、柏本を底本とし、絵本の『稻生平太郎物語』、『武太夫物語』、『稻生妖怪録比較頭書』の3つを基に増補改訂したものである。この『稻生妖怪録比較頭書』とは、「平田本を作る為に書かれた『稲生物怪録』諸本の比較研究書」(吉田麻子 1998)である。これは、平田篤胤門徒の森忠國が書いており、『稻生妖怪実記』と国前寺にあった武太夫の実記の2つの本と、平田篤胤が持っていた諸本との比較がなされ、三次での実地調査で得た情報や筆者による考えが加えられている。

第3節 稲生物怪録絵巻

本論では、稲生物怪録絵巻として、『稻亭物怪録』と『(無題)稲生物怪録絵巻』を取り上げている。『稻亭物怪録』には、柏正甫の自叙があり、柏本系統の絵巻と考えることができる。しかも、柏正甫が稲生武太夫に聞いた話を書き記し、猗猗斎竹能が『稲生物怪録』を披見書写する前に『稻亭物怪録』は作成されたと考えられる。また、内容も柏本と『稻亭物怪録』類似している。

また、『(無題)稲生物怪録絵巻』は堀田克己氏が所蔵しているため、堀田本と呼ばれている⁽⁷⁾。この堀田家本は、巻頭部分が欠損している。しかし、堀田家本の写本と考えられる『三十日の月』に欠損部分と思われる巻頭部分が残っている。怪異の内容に関しては、相違点もあるが『三次実録物語』と共通している点が多い。

ここから、『稻亭物怪録』は柏本をもとに、堀田家本は『三次実録物語』をもとに作成されていると考えられる。

第4節 位置づけ

知切光歳『圖聚 天狗列伝 西日本編』において、備後国の天狗譚として『稲生物怪録』を挙げている。その中で、知切光歳は、

「長年住み慣れた三次の城下に、昔起った稲

生武太夫の妖異談を、聞知しないはずがないのに、杏坪は龐大な『芸藩通志』の中に一行も書き残していないのは、稲生怪談を、一篇の架空談として笑殺し去ったのであろうか。さりとはお固い学者気質である。」(知切光歳 1977)

と言っている。杏坪とは、頼杏坪のことで、文化8(1811)年から天保元(1830)年までの20年間、郡代、郡奉行、町奉行として役所勤めを三次でしている。そして、その間に編修したのが『芸藩通志』であり、この『芸藩通志』は、「日本の地誌中屈指の名著」(知切光歳 1977)である、と知切光歳は言っている。その上、『蕉齋筆記』において、

「同行の者貸本屋よりいろゝの咄し本を貸出せし内に、備陽物怪録と云書物十卷有、予も傍よりのぞき見るに、八九年已前廣島にて、柏村正甫直右衛門たはむれに書つらね、予に序を頼みし、備後三次稲生氏武大夫が家妖怪を記せし本也」(小川白山)

と書いてあることから、当時、『稲生物怪録』は知識人が読むものというよりは、女子供が貸本で読むものだと考えることができる。しかし、『楓軒偶記』⁽⁸⁾において、『稲生物怪録』を読んだという表記があり、筆者の小宮山楓軒が水戸藩の儒学者ということから、平田篤胤が注目したように江戸後期になると次第に知識人も見るようになっていったのではないだろうか。

また、繁原央⁽⁹⁾は「『稲生物怪録』成立考」において、『三次実録物語』における妖怪出現が50あることから、最初の三井権八と比熊山でした百物語の内容が1か月間の怪異だったのではないかと指摘している。つまり、百物語をしたことが原因で1か月間怪異があったのではなく、一か月間の怪異は稲生武太夫が百物語の際に稲生武太夫が話した内容であるということである。この指摘に関しては、検討の余地はあるが、『稲生物怪録』の1か月間の怪異には百物語としての性格を有していると考えられる。

第2章 『稲生物怪録』の内容分析

『稲生物怪録』は、主人公・稲生武太夫とその隣人・三井権八が勇氣試しをすることになり、比熊山にのぼり百物語をするところから始まる。その約2か月後の7月1日から1か月間、平太郎の屋敷で怪異が起こるといった内容になっている。

柏本、『三次実録物語』、『稲亭物怪録』、堀田家本の怪異を比較表にまとめた。どこから怪異が現れているかを見てみると、屋根の上、または天井から妖怪が現れているものがいくつかあるがわかる。この比較表を見てみると柏本には7つ、『三次実録物語』に5つ、『稲亭物怪録』に6つ、堀田家本の天井からの怪異の図を参考資料①と②を示した。山本陽子は、屋根は人の世とあの世の境界となり、妖怪や幽霊がこの世に出現するための足場となっていると言っている。つまり、屋根と人の生活空間が接しているのが天井である。その天井があの世界とこの世の境界となり、そこから妖怪は出現するのだ。しかも、ほとんどの妖怪が顔や手などの体の一部を出現させている。また、柏本、『稲亭物怪録』においては、7月下旬から天井から声がするという怪異が増えていき、平太郎は7月29日の天井から手が出てくる怪異で天井に何か住んでいるのではないかと、と言っている。山本陽子が、屋根における境界性について、次のように続けている。

「怪異の出方は天井や屋根を水面に見立てれば、理解しやすい。水面に顔や上半身を浸けて水中を覗くように、幽霊は天井から顔を覗かせ手を入れ人を掴み上げるのであり、水や足を突っ込み魚を驚かせて戯れるように、天井から手や足が突き出されるのである。」(山本陽子 2013)

つまりは、天井から妖怪が見ており、時折、怪異に驚いている人を見て笑ったり、また違うときには顔や手を出したりしていると、考えることができる。

また、天井以外にも壁、戸口もまた屋内での境界と考えることができる。このように、怪異一つ

一つに関して、境界を意識した場所が選ばれていると考えられる。

表1 怪異一覧表(比較表)

話番号		粕本	三次実録物語	稲亭物怪録	稲生怪録絵巻
1	題名(日にち)	稲生屋敷物怪初まりの事 (7月1日)	(7月1日)	稲生屋敷物怪初発之事 (7月1日)	(7月1日)
	怪異	障子が明るくなったので、開けてみると、毛が生えた大きな手につかまれた。その手から逃れると、床下に逃げ込まれた。	障子が明るくなったので、開けてみると一抱えほどの髑手がつかんでくる。やっとの思いで、刀を取って縁に出ると床下に逃げられた。	行燈の火が消え、障子が明るくなったり暗くなったりする。障子を無理やりあけると両肩と帯に丸のような毛をはやした手をかけられて、引張られた。やっとの思いで、体を引き離し、刀を取ると床下に逃げられた。	障子が明るくなったので、出てみると、巨大な髑手が平太郎をわしづかみにした。もみ合っているうちに離れたので、刀を持ってくると、床下に入り込まれた。
	どこから	向こうの屋根の上		向井の大手の屋根の上	
2	題名(日にち)	(7月1日)	(7月1日)	(7月1日)	(7月1日)
	怪異	権八が平太郎の屋敷の前で、小坊主が茶碗に水を入れて通るのを見て、すれ違った途端、全身がしびれた。	10人ほどの一つ目の小坊主が手に白い天目を持って、権八の周りをまわっていた。 (権八の屋敷)	権八は平太郎の屋敷の門の前で小坊主が1人、お茶を淹れて権八の前に持ってきて通り過ぎると、そのまま全身がしびれて、動けなくなった。	権八の家では一つ目の同時のようなものが出てきて金縛りにあっていた。
	どこから				
3	題名(日にち)	(7月2日)	(7月2日)	(7月2日)	(7月2日)
	怪異	畳の隅がばたばたと上がった。	行燈の火が細く伸びて、天井、屋根まで焼いてしまった。ほどなくして、元の天井に戻った。	畳の隅がばたばたと上がり、それは次第に強くなった。	行燈の火が前触れなく燃え上がり天井まで届きそうになった。
	どこから				
4	題名(日にち)	(7月3日)	(7月2日)	(7月3日)	(7月2日)
	怪異	畳の隅がばたばたと上がった。	庭、畳が濡れた。朝になって起きたら、生臭いにおいはなくなっていたが、そこら中が濡れていた。	畳の隅がばたばたと上がり始めた。	水が湧き出て、部屋一面に水がたたえられた。しばらくすると水は潮が引くように次第に消えていった。
	どこから		畳		
5	題名(日にち)	三日の夜大地震の怪 (7月3日)	(7月3日)	(7月3日)	(7月3日)
	怪異	家鳴りがして、地震も強くなった。外から屋敷を見ると、隣の家の屋根も何事もなかった。	逆さの女の生首が出てきて、髪が3つに分かれて、髪で歩いてくる。そして、髪で平太郎を包み、体中を嘗め回した。	どろどろとなりだし、次第に家鳴りが強く、障子が外れるほどになったので、外へ出てみると、隣の家も平太郎の屋敷の屋根も動かず、ただめきめきと家鳴りしていた。	女の逆さ生首が髪を毛を足のようになり立てて飛んできて、平太郎の頭に立て、挙句の果てに舌で嘗め回し始めた。
	どこから				鼠が出るくらいのお小さな穴
6	題名(日にち)	大風の怪(7月4日)	(7月3日)	(7月4日)	(7月3日)
	怪異	平太郎の家が大風が吹くようになりだし、家鳴りもしました。	瓢箪が下がってきて長くなった。	平太郎の屋敷だけが、大風を吹くようになり出した。	瓢箪の蔓が床の上にぶら下がった。
	どこから		天井		天井
7	題名(日にち)	木履の飛ぶ怪(7月5日)	(7月4日)	(7月5日)	(7月4日)
	怪異	鴨居の上にある穴から新八の木履が飛び込んできて、人が歩くように舞い歩く。	瓶の水を汲もうとしたら、瓶水が凍っていて、動かず、茶釜の蓋もあかない。田子の水も凍っている。茶釜の下を他行としたが、火吹竹で吹いても風が届かない。	平太郎の屋敷が家鳴りしていた。	お茶を沸かそうとしたが、ビンの中の水が凍り、茶釜の蓋があかない。その上火吹きだけを噴いても風が通らない。また、違い欄に置いていた髪が簪うかのように舞い上がった。
	どこから	鴨居の上にある穴			
8	題名(日にち)	脇差の飛怪(7月6日)	(7月4日)	(7月5日)	(7月5日)
	怪異	抜き身の刀が新八の着ていた帷子の右袖を切って、後ろの唐紙へ鉦元まで突き刺さった。刀を見てみると家来に貸した刀だった。	鼻紙が濡れ、ところどころ、散っていた。朝起きてみると、唐紙障子が壁についていた。	鴨居の上にある穴から新八の木履が飛んできて、家の中を人が歩くように飛び回った。	八方に指のような足がついて、カニのような目がついている石が落ちてきた。夜明け、台所に行くところの家の漬物石が置いてあった。
	どこから				鴨居の上にある穴
9	題名(日にち)	(7月6日)	(7月5日)	(7月6日)	(7月6日)
	怪異	「トントココニ」と座敷にかけてある額から聞こえるので、額を下してみると、脇差の鞘が落ちてきた。	8、9人抱えの赤い石が表の座にあり、目と指が数々ついて、転がってきた。台所、板の間に上がったところで足でけて落ちてきた。朝見ると、台所の庭に石があった。	抜き身の刀が飛んできて、来ていた新八の帷子の右袖を切って、後の唐紙へ鉦元まで突き刺さった。それを見ると、家来に貸した脇差だった。	老婆の大きな顔が戸口をふさいでいるので、平太郎は間もなく小柄を打ち込んだが動かないので、そのまま捨ててしまふ。どうしようかと小柄が宙に浮いたまま、しばらくしたら落ちた。
	どこから	座敷にかけてある額			薪小屋の戸口
10	題名(日にち)	白き物の怪(7月6日)	(7月6日)	(7月6日)	(7月7日)
	怪異	一抱えの白いものがふわりと舞い歩いてきた、それを見てみると古い塩俵だったので、庭へ投げ捨てた。	小屋の戸口に婆のしかめっ面があって、通れない。脇差の小刀を持って、いろいろ打ち立てたり、石で目と目の間を打ち付けたが動かない。小柄を目と目の間に打ち込み、そのままにした。翌朝、行ってみると小刀が宙にあり、見ているうちに下石の上に落ちた。	「トントココ」で額から聞こえてきたので、額を下してみると、そこから飛んできた(話番号9) 刀の鞘が出てきた。	親友たちが平太郎を助けようとして棒や棒を持って行ったところ、権八は槍を持って戸口の外へ懸ると門内に大きな坊主のようなものが見えるので、槍で着いた槍を奪われて、その槍は外から飛んできて、一人の髪の毛をさすめ、裏庭の方へ飛び出していった。
	どこから	台所		額	門内
11	題名(日にち)	播木手の怪(7月7日)	(7月6日)	(7月6日)	(7月8日)
	怪異	台所の入り口いっぱい大きな袖があり、その袖から出ているすりこ木のような手から、サボテンのように普通の人の手が出てくる。放っておいても、顔を時々触り、それをねのければ消えるが、また出てくる。	右下の先に死人がいて、死人の右下に石を置いたところ、股に入ってきて、冷たいことこの上なかった。	台所に一抱え分くらい大きな袖で丸く見える白いものが出てきて、舞い上がった。そして、それは座敷の隅へ待ってきて、来ていた川田茂左衛門と堀場権左衛門の間に落ちたので、見てみると古い塩俵だった。	塩俵がふわふわと飛んできて、頭上をぐるぐる回り、塩をばらばらと植氏にした。そして、高下駄が飛んできて、唐紙を突き破り、外へ飛び出した。
	どこから	台所の入り口		台所	
12	題名(日にち)	八日の夜大勢夜伽に来る事并同夜煤掃の怪(7月8日)	(7月7日)	播木手の怪(7月7日)	(7月9日)
	怪異	畳が上がっていき、それが次第に強くなっていき、黒煙のように塵埃が舞って、目も明けられなほどだった。	庄太夫が傘のしゅっべい、甚左衛門が名弓を持ってきて、権八が妖怪が来たならこの鐘で突き止めようとして、外に出た。しゅっべいの壺を打った音は効果があったが、甚左衛門が弓の弦の音をさせると、大手の黒いものが出てきたので、権八が鐘で突き刺すと、その鐘を取られて、その鐘は障子を破り、甚左衛門が持っている弓をこすり、台所の唐紙に立った。	口いっぱい白い袖があり、その袖から大きな手が出てきて、サボテンのように普通の人の手が出てきて、次第に小さい播木手となった。捨て置いて、寝ると、その播木手は平太郎の顔を触っていた。	影山亮太夫が先祖伝来の鎧刀を持ってきてけけ物退治をしようとしたが、刃こぼれをしてしまふ。それを悔やみ、亮太夫は切腹してしまう。どうしようかと思索している所に両太夫の言霊が門に来て、いろいろと恨みを言ってくる。ふと気づいて、死体が置いてあるところに行くところの姿もなくなっていた。
	どこから			台所の奥	

『稲生物怪録』と三次

13	題名(日にち)	(7月9日)	(7月8日)	八日の夜大勢夜伽之事	7月10日
	怪異	家鳴りがした	塩俵が天井の下にふわりと真真中に落ちた。また、木履も天井の下の方の壁が落ちている所から出て、鴨居のところで低くなったり、高くなったりする。押し込みの唐紙にも食いついた。	大勢で話していると、畳の隅が動き始め、それは次第に強くなり、塵や埃が強く立ち上がって、目も明けられないほどだった。	貞八が来たが、貞八の頭が次第に影れ上がり、その頭にも丸い穴が開き、そこから2つ3つと這い出てきて、見る見るうちに大きくなり平太郎につきかまかろうとする。平太郎が捕まえようとすると畳の間に潜って消えてしまった。
	どこから		(天井)		
14	題名(日にち)	灯し火の怪(7月10日)	(7月9日)	(7月9日)	7月11日
	怪異	灯火が次第に大きく燃えて、天井に届くほど、細長く大きくなった。ほおっておくと、次第に短くなり、元の大きさに戻った。	庄太夫が家に伝わる名剣を持ってきて化け物退治をするといった。黒い子犬のようなものが現れたので、それを切ったが、刃は折れてしまった。この刃は内蔵で持ってきたもので庄太夫は自害をしてしまった。平太郎がこれを悔やみ、死のうと思うが、夜が明けるまで待とうとする。門のところに正太夫の幽霊が現れて、お前のせいだから早く自害しろという、平太郎は庄太夫に抱き着くと、気づいたら幽霊もいなくなり、正太夫の血も死体の滲んでいた。	家鳴りがいつもより騒がしかった。	刀がなくなったので、平太郎が一声荒げると天井から鞘が落ちてきた。
	どこから				天井
15	題名(日にち)	はね踏の事(7月11日)	(7月10日)	灯火之事(7月10日)	7月11日
	怪異	上田治部右衛門がはね踏を持ってきて仕掛けた。翌朝見てみると、餌の鼠の油揚げがなかった。数日後、軒下につるしてあった。	貞八がかがんだ時、頭が二つに割れて、その中から10人ほどの血が付いた赤子が這い出てきた。這いまわらううちに赤子は1つになり、大きな目玉となった。	だんだんと灯火が細長く燃え上がり、天井まで届いた。	壺が転がってきて、門の外まで女を追いかけていった。
	どこから		台所の敷居口		
16	題名(日にち)	ときの声の怪(7月12日)	(7月11日)	はね踏の事(7月11日)	(7月12日)
	怪異	家鳴り、振動がすさまじくどこからともなく鯨波のように大勢で聞こえる。	彦之丞が次の間に刀を抜いて敷居に置いていたが、刀を探すと抜身の状態で鞘がないので、探すと、糸で釣られている袋があったので、それを見ると、その中に鞘があった。	上田治部右衛門がはね踏を持ってきて仕掛けた。翌日見ると、鼠に仕掛けていた鼠の油揚げだけが取られていた。数日後、鼠の油揚げは軒下に釣り上げられていた。	ヒキガエルが飛び出してきて、這いあがってきたので、ヒキガエルの腹の中にある赤い緒を持って寝ると、翌朝になると葛籠になっていた。
	どこから				押し入れの中
17	題名(日にち)	(7月13日)	(7月12日)	(7月12日)	(7月13日)
	怪異	家鳴り、振動がして、畳がばたばたと上がり始めた。	葛籠が棄なり、蚊帳の周りを歩き回り、蚊帳の中へ入って、平太郎の上へあがった。葛籠のひもを持って寝て、朝見ると、葛籠はかりが枕元に転がっていた。	家鳴り、振動がすまま軸、どこからともなく鯨波の声のように大勢の音が聞こえた。	西江寺へ行く途中、雷のように光る赤い石が空から落下し、平五郎の腰骨に当たり、気絶した。
	どこから				空
18	題名(日にち)	笠袋の怪(7月13日)	(7月12日)	(7月13日)	(7月14日)
	怪異	暗くなったので、通りがかった中村源太夫に提灯を借りた。津田市郎右衛門の屋敷の敷の中から笠袋のようなものが飛び出てきて、巻き付き、息もできなくなり、気絶した。その時、借りていた提灯をなくしたので、後日中村源太夫にその旨を話に行ったら、その日は外へ出ていない、と言われた。	上田次郎右衛門が魔除の札を4枚書いて四方の柱の上に張ったが、西江寺の和尚が間違いがあるという、書き直して上田次郎右衛門の札の上に張った。すると、上田治部右衛門が書いた札の真真中に輪違い書かれていた。	家鳴りや振動がしだし、畳もばたばたと上がるようになった。	裏の白部屋から白を掻く音がしきりにするのを、行ってみると、白が勝手についていたので、まだついていない米を白の中に入れておいた。一晩中白を掻く音が聞こえたが、翌朝行ってみると、白の中の米は全く白くなっていなかった。
	どこから	津田市郎右衛門の屋敷の中			
19	題名(日にち)	卓、香炉の飛ぶ怪(7月14日)	(7月13日)	(7月13日)	(7月14日)
	怪異	西郷寺から借りた卓、香炉が畳から離れて、飛んだ。	長倉を連れて、西江寺へ行く途中、木全氏の敷が動き、そこから小桶ほどの黒いものが平太郎の眉間めがけて飛んできたが、それは、長倉の胸に当たり倒れた。	鉄砲の名人である長倉が西郷寺へ行く途中、真暗になったので、中山源太夫から提灯を借り、言っていたら、津田市郎右衛門の家の中から黒いものが飛び出てきて、長倉につき、息もできなくなり、気絶した。その時、提灯をなくしたので、後日、中山源太夫にその旨を伝えると、その日は家から出ていない、ということだった。	天井いっばいに巨大な老婆の顔が現れて、老婆の下が長く伸び、平太郎を管め回した。
	どこから		木全氏の敷	津田市左衛門の家の敷の中	天井
20	題名(日にち)	えいせい声の怪(7月15日)	(7月14日)	(7月14日)	(7月15日)
	怪異	裏の方からえいせいと掛け声をして大勢で重いものを持っていく要するである。台所の板の間まで来ると、どとどとすさまじい音がしたので、行ってみると、裏の物置部屋にある香物桶であった。	天井いっばいに、婆の顔がある。蚊帳を越して、顔を下で舐った。	仏壇前の唐紙が開く、香炉が自然と上がり、仏壇も3間ほど歩くように動いた。最後には元の状態に戻った。	居間にかけてある籠から「トンコトサコココニ」と聞こえてくるので、顔を下してみると、象米がなくなり、籠が煤に交じって落ちてきた。
	どこから	裏の方	天井		籠
21	題名(日にち)	(7月15日)	(7月14日)	おひおひの声(7月15日)	(7月15日)
	怪異	卓、香炉が舞い上がり、蚊帳の中まで入ってきた。卓と香炉は分かれて舞い、少し傾いて、蚊帳の中に入った人の頭の上に灰がばらばらと散りかかった。	小屋のからうすがひとりだけで摘んでいる。棒を抑えても、平太郎もろともついているので、7、8升の黒米をつかせると、つき続けたら、しばらくして、見てみると一つも剥けていなかった。	裏の手から大勢の「えいせい」と掛け声をして、重いものを運んでいるような音がする。それは、台所の板の間上音がすると何かを落とすようなすさまじい音がして、それをきっかけに家鳴りが強くなった。見てみると、裏の物置になすを塩押しに漬けていた香物桶だった。	居間の中が夜なのに昼のように明るくなった。何もかもが糊で塗り付けたようにねばりつきだしたので、柱に寄りかかって眠った。
	どこから				裏の手
22	題名(日にち)	(7月16日)	(7月15日)	(7月15日)	(7月16日)
	怪異	天井がめきめきとなりだし、低くなっていた。	蚊帳がすべて白くなり、波打つようだった。それから畳、布団が広く広がった。	卓や香炉が自然と舞い上がって、蚊帳の周りをまわっていた。香炉は蚊帳の中へ入り、来ていた3人の顔に灰をかけた。	田楽のように申刺しになった小坊主の首が13、14ほど飛び出てきて申の足で平太郎の枕元は跳ね回る。
	どこから	天井			
23	題名(日にち)	輪違ひの怪(7月17日)	(7月16日)	(7月16日)	(7月17日)
	怪異	庭にある樫の木の方から輪違ひのようなものが数多く現れた。その輪違ひには顔があり、笑うものもいたららむのものもあった。	「とんど、ここに」と表の額がいたので、あげてみると、家来の権平が前に無くした鞘が落ちてきた。	天井がめきめきとなりだして、低くなっていった。	人の形をした白いものが見え足音が聞こえるので、行ってみると漬物桶が置いてあった。
	どこから	樫の木の方	表の額	天井	勝手口の方

24	題名(日にち)	野狐除の札(7月18日)	(7月16日)	(7月17日)	(7月17日)
	怪異	西郷寺で祈禱してもらった野狐除の札に薄墨で梵字が書かれていた。	不気味な音がして何か落ちる音もしたので、火をともしてみてみると、23日前になすを入れた植床が入った桶だった。	樞の木がある所から輪違が来て、その輪違には顔が付いており、笑うものもいればにらむ者もいる。	刀がないので、探すと蚊帳の上に置いてあった。蚊帳の中に入り、蚊帳の外を見ていると、肌や菓子鉢が飛び回った。
	どこから			樞の木のあたり	
25	題名(日にち)	(7月18日)	(7月16日)	野狐除の積(7月18日)	(7月18日)
	怪異	諸道具が舞い歩き、茶碗、煙草盆なども飛んできたり、飛び上がったりました。	香炉があちこち動き、宙を駆け廻り、灰が散ってしまった。	西郷寺で祈禱してもらった札に梵字が薄墨で書かれていた。	墨がすべて天井からくりあげられた。おそろすとすると、すべての量が元の状態になった。
	どこから			天井	
26	題名(日にち)	曲尺手の怪(7月18日)	(7月17日)	(7月18日)	(7月18日)
	怪異	背中をたたくものがあるので、振り返ってみると、台所口から曲尺のような手が折れて、桶蓋のような手を伸び縮みしている。	くうがきて、平太郎の様子を窺っているのと、行水盥が転んできて、くうを追いかけた。平太郎が声をかけると盥は止まった。	諸道具が飛んできて、茶碗も台所から居間へ飛んできた。	錫杖があちこち飛び回っていた。
	どこから	台所口		(台所)	
27	題名(日にち)	老女首の怪(7月18日)	(7月17日)	曲尺手の怪(7月18日)	(7月19日)
	怪異	胸の上へかぶり重く、見ると、老女の首があった。払いのけようとしても、踏み飛ばそうとしても、蚊帳の外へ逃げいで、そのため、着て置いて置いたが、胸の上へ来るので、なかなか取れなかった。	小坊主の頭に串刺したものが10ばかり踊るように動き、1つになり大鯰になった。	背中をたたく者がいるので、振り返ってみると、台所口から曲尺のような手が伸び縮みしている。	運八が畏を仕掛けて、畏の陰に隠れていると、巨大な髭手が運八は鼻をつまみ上げた。
	どこから			台所口	
28	題名(日にち)	天井の下る怪(7月19日)	(7月18日)	(7月18日)	(7月20日)
	怪異	天井が次第に落ちてきたので、放っておくと、頭や行燈が天井を抜け出し、天井の上が詳しく見える。それでも知らぬ顔をしていると、だんだん天井が上がってきた。	畳が天井から糸でつるされてしまったので、平太郎が支え、権八が下して敷きなおした。	老女の首が胸の上へ載ってきた。払いのけようとしても、踏み飛ばそうとしても逃げれば逃げれば込んでくるので、なかなか寝れなかった。	中村平左衛門の家の使いと言って、美しい女が御菓子を入れた重箱を持って、見舞いにやってきた。女を見送りに行くので、門前で消えるようになくなった。隣の法事で作った牡丹餅が重箱事なくなったという噂を聞き、隣に器を見せたら隣の器でなかったことが分かった。
	どこから	天井	天井		
29	題名(日にち)	"踏落し踏の事并大手の怪(7月20日)	(7月18日)	(7月19日)	(7月21日)
	怪異	踏落しという異をかけた十兵衛が客雪隠に隠れていると、畏の方から大きな手が出てきて、雪隠の戸と十兵衛を一纏につかんだ。その時、雪隠の戸は伸びたが、次の日見ても、少しも壊れていなかった。	錫杖が3つずつ、宙に浮いた。	天井が低くなり、頭や行燈も抜け出て、天井の上の様子を見ることができた。天井はだんだん上がっていき、頭や行燈が抜け出たところを見たがなんとなくなかった。	行燈をともしると人影が壁に移ってきた。人影は顔や形がはっきり見え、書見台を前に時折書物を繰り、何か講釈をしている様子である。
	どこから	仕掛けた畏の方		天井	壁
30	題名(日にち)	逆さ首の怪(7月21日)	(7月19日)	踏落し踏の事(7月20日)	(7月22日)
	怪異	台所の隅の柱から女の首が逆さになって、歯を黒く染めて、ここにこ笑いながら飛んでくる。次第に平太郎の膝の前に飛んでくるので扇子でうとうとしても飛びのくし、追い回して仕留めようとしても消えてなくなる。	新八の紹介で十兵衛がわなを仕掛けて、十兵衛が隠れていたが、顔を撫でられたり、鼻をつままれたり、お尻を撫でられたりして不思議なことが起こるので帰ってしまった。ガタガタと畏が動いているような音や踊っている音がする。翌朝見ると、畏はきれいに外されてい	十兵衛が畏を仕掛け、客雪隠に隠れていると、畏の方から大きな手が出てきて、雪隠の戸と十兵衛をつかんで引きはがそうとした。十兵衛は倒れ、雪隠の戸は砕けていた。朝見ると、その雪隠の戸はなんとなくなかった。	棕櫚の箒が今の中を丁寧に掃きまわった。
	どこから	台所の隅の柱		畏の方	
31	題名(日にち)	似せ銘剣の怪并平太郎危難の事(7月22日)	(7月20日)	逆首の怪(7月21日)	(7月23日)
	怪異	陰山正太夫が兄の銘剣を持ってきて、妖怪を退治しようとするが、その折に銘剣を折ってしまった。それを悔んで切腹する。平太郎は陰山を死なせてしまったため、自分も切腹をしようと思うが、朝になるのを待ち、陰山の遺体がある所に行くところ、遺体も血の跡もない。そこで、妖怪に化かされたと思づく。	中村平左衛門の使いという女が来て、たくさんの牡丹餅と炊砂糖が入った風呂敷が贈られる。2か月後、隣首六が女からもらった風呂敷と重箱を見、母親が親里に持っていくために牡丹餅を入れた重箱が7月20日に無くなって探していたといった。	女の首が髪を円座のように巻いて、歯を黒く染め、笑いながら飛んでくる。扇子でうとうとしたり、追いかけまわすが逃げたり、消えたりする。	権八の家が騒がしいので行ってみると、無人の家でお椀や小道具、着物までが散らばっていた。
	どこから	台所(陰山を襲った妖怪)		台所の奥の角の柱	
32	題名(日にち)	(7月23日)	(7月21日)	銘剣之事(7月22日)	(7月23日)
	怪異	平太郎の家に来ている陰山彦之丞の刀身がなくなった。刀を探すがないので、朝、また探しに来るといって、帰ろうとすると、中戸口の鴨居の上から刀がぶら下がってきた。そして、それを取って彦之丞が帰るとすると、天井から大きな笑い声が聞こえた。	行燈をともしたところに人の顔が映り、講釈をしており、声はしなかったが、顔、手などは見えて、たびたび見台上の本を置いていた。	陰山正太夫が銘刀を持ってきて、妖怪退治をしようとする。その刀を2つに割ってしまった。兄に内緒で持ってきたため、正太夫は自害する。平太郎はこのことを悔やんで、自分も死のうとするが朝まで待つことにする。朝になり、見ると庄太夫の遺体も血もなくなっていた。	巨大な蜂の巣がかり、巣からは赤い、または黄色い泡が噴出した。
	どこから	天井			天井
33	題名(日にち)	大たらいの怪(7月23日)	(7月22日)	(7月23日)	(7月24日)
	怪異	台所の棚から何か落ちたようなささいい音が聞こえ、それがごころごと座敷に転んできた。それを見ると湯殿にある大たらいだった。	棕櫚箒が宙に浮かび、座敷中を隅から隅までまわったり、転びまわったりする。床の下に落ちたような大きな音が3回した。	刃物が飛んできた。	大きな蝶が部屋の中に1匹飛来してきて、柱に当たって粉微塵に砕け、数千の小蝶となり、風が旋が散るのように群がって飛んだ。
	どこから	台所の棚			
34	題名(日にち)	火の燃る怪(7月24日)	(7月23日)	(7月23日)	(7月24日)
	怪異	台所の方から火が燃える音がするので、出てみると、かまどの中から火が燃え出て、かまどの前の板敷から床下まで燃えこんでいる。瓶の水をかけるが、それをかける前に火が消えた。	隣五左衛門の家が騒がしいので見てみると、書物を残らず出し、膳碗や箸が並べられている。それを片付けていると、天井が割れ上がり、権八が脇差を着くと、燗のような濡れた煤が付いた。	彦之丞の抜身がなくなりました。しばらくして、朝また探しに来るといって、帰ろうとすると、鴨居の上からその刀がぶら下がっていた。その刀を取って、帰ろうと戸口を出ると、天井からどとと笑い声が聞こえた。	行燈の下が激しく光るので、見てみると、たまたま大きく燃え上った。行燈はまるで石塔のように見えた。
	どこから	かまどの中	(五左衛門の屋敷)	天井	
35	題名(日にち)	鳴弦の事并槍の飛來る怪(7月23日)	(7月23日)	大だらいの事(7月23日)	(7月25日)
	怪異	鳴弦で妖怪を退治しようとするが、弓を取ったところ、何か加害物が弦を突っ切って、落ちたので見てみると、屋根の上に怪しいものが入り込んできて、屋根の上に怪しいものが入り込んできて、そこを槍で突き付けると、その槍が引く張られて、奪われてしまったといった。	天井からハチの巣が数々下がり、その穴から黄色い泡が吹いていた。	大だらいの事(7月23日)	裏庭へ行こうと縁側へ降りると、ひやりと死人を踏みつけたような感じがするので、驚いて足元を見ると、青い人達がいて、縁側に上ろうとしたが、泥田に足を踏み込んだようになり、ようやく縁側へ上がったが、その肉が裏の裏につき、にちゃにちゃしていた。
	どこから	(屋根の上)	天井	台所の棚	

『稲生物怪録』と三次

36	題名(日にち)	柿の怪(7月26日)	(7月24日)	(7月24日)	(7月26日)
	怪異	南部角之進が家にいる柿の木を柿を持ってきて、それを食べようと器に入れていた柿を見ると、種ばかりで柿の味が無い。しばらくたつた後、天井がめきめきなり、種ばかりになったと思つた柿が天井から落ちてきた。	4尺ほどの蝶が入ってきて、飛び回る。その序は5歩ぐらいの小さい蝶に数々変わった。	闇へ行っているときに台所から燃える音があるので、行ってみると、かまどの中から火が燃え出ている。水をかぶせると、水がかかる前に火は消えた。	女の首が飛んできて、女の首が手となり、平太郎が寝ている所を飛び回って、その手で平太郎を撫でまわす。
	どこから	(天井)		台所	
37	題名(日にち)	大白の怪(7月26日)	(7月24日)	鳴弦之事(7月25日)	(7月27日)
	怪異	台所から雷が落ちたような音が聞こえたので、裏の物置においてある大木から作った樽白だった。力持ちの真木が投げ出した。翌日見ると、白は物置に戻っており、投げ出したところには白の角があったと思われるくぼみがあった。	行燈、石塔に青い灯をともした。	鳴弦で妖怪を払おうと弓を持つと表の方から長いものが飛んできて、弓の弦を突っ切って、落ちたので、見てみると槍だった。そのあと、権八が来て屋根の上の怪しいものがいたのでそれが落ちた時に槍を突き刺したらその槍を奪われたといった。	居間が薄暗くなり、やがて闇のように暗くなった。しばらくすると、まるで火が輝くように明るくなった。
	どこから	台所		(屋根の上)	
38	題名(日にち)	網顔の怪(7月27日)	(7月25日)	(7月26日)	(7月27日)
	怪異	人の顔が網状に広がっていった。その顔は消えては現れてを繰り返す。部屋一面顔になった。	踏石の上に死人がいて、冷たいので飛んで降りようとするが、死人の腹の皮と足の裏の皮がついて離れない。いろいろしても離れないので、困っていたら、元の踏石に戻った。	南部角之進が持ってきた柿を器に入れていたので、食べようとその器を開けると種ばかりになっていた。八過ぎ、天井からその柿が落ちてきた。	拍子木の音が鳴り響き、女の笑い声やため息が聞こえてきた。
	どこから	台所		天井	
39	題名(日にち)	踏石の怪(7月28日)	(7月26日)	(7月26日)	(7月28日)
	怪異	踏石に降りようと、踏石へ降りると冷たい、ねばねばして縁に上がれない。よく見ると、死人の上へあがつたと思える。縁に這うようにしてあがつた足裏がにゅにゅと音を出して歩きにくかったが、居間へ降り足裏を見るが何もない。火をともし、踏石を見るが下駄だけがある。ただ、死人が寝るときはぼちぼちという音は一晩中なっていた。	床の下から木やり歌の音がして女の生首が宙を浮き、部屋内を回った。内臓が下がっており、平太郎に巻き付いた。	台所で雷が落ちたような音がするので、見てみると、大木から作った樽白だった。力持ちの善六が白を持ち上げて投げ捨てた。翌日見ると、白は物置に戻っており、投げ捨てた場所には白の角の跡のようによくぼんでいた。	尺八の音が聞こえてきて、同じような姿をした虚無僧が次々と平太郎の屋敷の中へ入ってきた。虚無僧は家の中いっばいに座ったり寝転がったりして、尺八を吹いていた。
	どこから	床の下		台所	
40	題名(日にち)	天井より手の出し怪(7月29日)	(7月27日)	網顔の事(7月27日)	(7月29日)
	怪異	背中をたたく音がする。振り返ると、天井の隅から手だけがぶら下がって、しずしずと天井に引っ込んだ。	外の壁が幕を引くように、気黒くなり、また白くなった。	次の間に網のような顔が出てきて、それが消えては現れを繰り返す。屋内残らず顔になった。	薄気味悪い風が家の中で吹き込んできた。また、星の光のようなものが現れ、それが壁火のように粉塵塵になり、風と共に吹き込んだ。
	どこから	天井の隅			
41	題名(日にち)	大首の怪(7月29日)	(7月27日)	踏石の怪(7月28日)	(7月30日)
	怪異	屏を取りに裏の物置に行く。戸口いっばいに大きな老婆の顔があり、戸口をふさいでいる。そのまま行きかかっても老婆は動かず、中に入る事ができない。火箸で突き刺しても動かないので、両腕の間に火箸を刺して帰った。翌日、行ってみると、火箸が宙に浮いているので、取ろうとすると、ぐわらりと落ちた。	空から拍子木の音が床下に響き、そのまま女の音がした。	露地の雪隠に行くところ、踏石に乗ると、冷たいので、見ていたら死人の腹に乗っていた。やっとなで、縁に這いあがると、足の裏がねちねちやっていたが、居間に帰ってみると何もなかった。そのあと火をともし縁に出てみると、踏石があるだけだった。ただ、死が寝るときはぼちぼちという音だけは鳴まっていた。	部屋の戸の蓋があり、そこから灰が噴出して、高く舞い上がり、やがて一つの塊となり、大きな顔となった。次第に顔のこぶの穴からミズが這いだしてきて、ミズが嫌いな平太郎はうろたえていると、前方の壁に大きな目や口が現れて、ケラケラと笑う。ミズは消え失せ、壁の顔は平太郎をにらみつけていた。
	どこから	物置の戸口	空から		
42	題名(日にち)	(7月29日)	(7月28日)	(7月29日)	(7月30日)
	怪異	家鳴りがひどく、天井からは婦人のなく声などが聞こえ、大勢で何か口々に言うような声も聞こえた。	虚無僧が3人、尺八を口に当てて、音が出ないが吹く形をとっていた。そして、蚊帳の中へ入り、平太郎の上に載った。	背中をたたく者がいるので、振り返ってみると、天井の隅から手だけがぶら下がって、静かに天井に引っ込んだ。	身内のいい40歳ほどの浅黄の袴を着た男が入ってきた。男は山本五郎左衛門と名乗り、人をたぶらかすことを100回積めば魔国の頭になれるので、今まで85人たぶらかし、平太郎が86人目だった。しかし、家業も散れたので、帰るといって、棧を渡って帰っていった。
	どこから	(天井)		天井	表の方
43	題名(日にち)	ミミズの怪(7月30日)	(7月29日)	大首の怪(7月29日)	
	怪異	炬燵のふたが自然と舞い上がり次の間へ飛んで行った。炭塵の灰が舞い上がり、茶釜のようになり丸くなった。そこからミミズが這い出てきて、平太郎のそばに近づいてきた。ミミズが嫌いな平太郎は気が失われないことを取柄として耐えていると、次第に元のように戻って、炬燵のふたも元の状態に戻った。	四方から風が吹き込み、星も吹き込んだ。	炭を取りに物置に行くときと婆の大きな顔が出て、物置の中へ入れない。火箸でつつくが動かず、ねばねばしている。捨て置こうと思つて、両目の間に火箸を差し込んだ。翌日、見ると、火箸は宙に浮いており、火箸を取ろうとすると、落ちた。	
	どこから	炭櫃		物置の戸口	
44	題名(日にち)	物怪帰去の事(7月30日)	(7月30日)	(7月30日)	
	怪異	太った大きな男が花色の帷子と袴を着て腰に両刀を刺してきた。男は、山本五郎左衛門と名乗り、魔王の類だといった。比叡山で平太郎に会い、平太郎が難にあう年月であったため怪異を起こした、と言つて帰っていった。	炬燵の灰が青坊主の頭となり、床の下から火がたかかれ、頭が赤くはれ、そこからミミズがこぼれ出てきた。ミミズ嫌いな平太郎の体中にミミズが張り付き、困り果てた。	炬燵の蓋が次の間へ飛んでいき、炭塵の灰がだんだんと丸くなり、茶釜のようになり、そこからつつくミミズがあふれてきた。平太郎は、ミミズが嫌いなため、気が失われないことを心掛けて、耐えていた。すると、だんだんもとの状態に戻った。そして、炬燵の蓋も次の間から舞い戻ってきた。	
	どこから			炭櫃	
45	題名(日にち)		(7月30日)	物怪帰去の事(7月30日)	
	怪異		人知れず露地の戸が開き、陰子もあき、浅黄小紋の袴を来た四角四面の男が来た。その男は山本五郎左衛門と名乗り、世界の頭をたぶらかし、その数が100になると魔国の頭になれることができる。これまでに85人をたぶらかし、平太郎が86人目である。そして、家業散れたので、ここを去る、といった。そして、棧を平太郎に預け、帰っていった。	背の高い太った大男が花色の帷子、袴を着て、大小を帯刀して、現れた。男は、山本五郎左衛門と名乗り、魔王の類だといった。平太郎は難にあう年月だったので、驚かそうとして怪異を起こしたといつて、帰っていった。	
	どこから				

第3章 三次の概要

第1節 地勢

広島県三次市は、中国地方のほぼ中央に位置しており、広島県の北部、かつての備後の国の北西部である備北地域の一部である。また、標高150～350mの盆地を形成している。この三次盆地は、衝上断層の作用によって生まれた凹地に河川が運び込んだ土砂が堆積して形成されている。平地の部分は、東西5km、南北2kmと三次町にある小関山公園の展望台から見渡せる平地である（図2）。一般に、三次盆地に流れ込む河川に沿ってところどころつくられた氾濫原を含めた広い範囲を三次盆地という。三次盆地には、東から馬洗川、南から可愛川、北から西城川、神野瀬川が流れ込んでおり、三次は、広島県の総面積の3分の1の地域から川が集まる「水郷」と呼ばれていた。また、可愛川に馬洗川、西城川、神野瀬川が合流し、可愛川が江の川と名前を変えて、島根県の江津市で日本海に流れ込む。



図2 尾関山から見た三次（筆者撮影）

第2節 江の川

江の川は、中国地方では最も長い川であるため、「中国太郎」とも呼ばれている。また、江の川の流域面積は広島県、島根県合わせて、3900km²と島根県の総面積をしのぐほどである。図4は江の川の流域をあらわしている。この江の川は、中国山地が出来上がる前のなだらかで広い平原を流れていた大河で、その後、中国山地が盛り上がり、現在の状態となっている先行河川である。そのた

め、一般的に広島県にある山を源流とする河川は瀬戸内海に流れるが、この江の川だけは広島県山県郡にある阿佐山を源流点としているが、日本海に流れる川となっている。そのため、江の川はその成り立ちから、分水嶺と海の間を急な角度で流れる周辺の川に比べて、傾斜が緩く、河口から上流の広い範囲まで船を使いやすいことや、船を使って日本海側から中国山地を超えて瀬戸内海まで入って行くことができるという特徴があったため、交通路として江の川は重要視されていた。



図3 江の川流域
（『江の川』編集委員会『江の川』 p2より）

また、中国山地は、たたら製鉄における鉄の原料となる良質な砂鉄の大産地だったため、盛んにたたら製鉄が行われていた。そのため、江の川の舟運は中国山地のたたら地帯を横断するため、製鉄品と米・木炭が中心となっていた。しかし、このように江の川を本流として、馬洗川、西城川、可愛川の大きな支流が合流する三次盆地は、洪水が頻繁に起こった。それは、1620年から1972年の350年間で190回の水害が起こり、平均すると2年に1回は洪水が起こったということである。

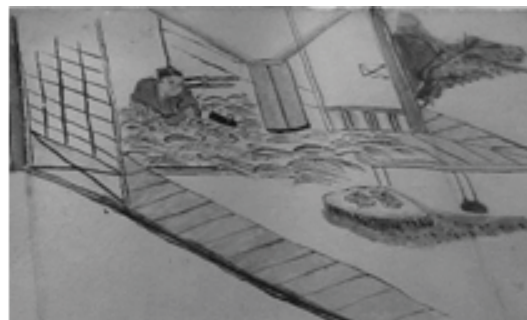


図4 畳から水が湧き出る怪異
（『三十日之月』筆者撮影）

『稲生物怪録』と三次

倉本四朗は、この洪水が頻繁に起こる三次の土地柄に関連して、堀田家本、『三次実録物語』における7月2日の怪異(図5)について指摘している。3つの川に囲まれている三次藩城下町では洪水が起こると、よく浸水してしまう。その情景を7月2日の曇から水が湧き出てくる怪異があらわしているとしている。

第3節 気候

三次盆地は、気候の区分では瀬戸内海気候であるが、狭義には瀬戸内海気候と日本海気候に挟まった内陸性盆地気候であるため、夏季は瀬戸内海気候の影響を受けやすく、冬季は山陰、特に鳥根県の気候に影響されることが多い。そのため、三次の気候の特徴は夏は暑くて冬は寒いという四季の気温の差が大きいのだ。また、昼夜の温度差も大きく、4本の大きな河川が流れており、その河川からの水蒸気量が多いため、10月11月を中心として三次名物の「霧の海」つまり雲海が出現する。三次盆地に出現する霧は、200～300mと厚く、日の出直前が最高で、午前11頃まで霧が晴れないことが多々ある。

第4節 古代の三次

古代から三次盆地は、日本海側の人たちと交流していたといわれている。まず、この日本海側との交流が顕著にあらわれる遺跡が矢谷墳丘墓である。矢谷墳丘墓とは、弥生時代終末期ごろ、3世紀の墳丘墓といわれている。形は、四隅突出型墳丘墓を二つ重ねたような形で、「四隅突出型前方後方形墳丘墓」という特異な名称がつけられたりした。この矢谷墳丘墓から吉備地方独特のものである特殊器台や特殊壺や山陰地方と共通する鼓形器台、低脚杯、注口壺などが出土している。吉備地方独特の特殊器台や特殊壺は、備中南部で考えだされた超大型の壺とその壺をのせる台(器台)で、村や地域の首長の埋葬儀式専用の土器である。この特殊器台、特殊壺は、広島県安芸地方にはほとんど分布せず、吉備地方、近畿地方、出雲地方に分布している。つまり、吉備の特殊な埋葬儀式に使う儀式用土器は、中国山地を超えて出雲地方へ、瀬戸内海を通じて近畿地方へ運び込まれていることが分かる。こうした移動は、吉備の首長が

他地域の首長の死に際して、特殊器台、特殊壺を送ることによって、吉備と他地域の首長の連合を促し、吉備の影響力を拡大する有効な道具として使われたり、進んだ大陸文化や技術を取り入れていたといわれている。三次盆地の位置と吉備の位置を考えると、三次盆地が出雲と吉備を結ぶ重要な中継地だったことが分かる。

また、矢谷墳丘墓で見られる四隅突出型墳丘墓は、弥生時代の墳丘墓の中でも、方墳の墳丘墓の四隅が外に突出した形である。これは、主に弥生時代後期の鳥根・鳥取の山陰地方から、福井・石川・富山の北陸地方と日本海沿岸地域に集中してつくられている。このことから、朝鮮半島など大陸との交渉や日本海交易など海を媒介とした人や物の行き来が、この四隅突出型墳丘墓を広めた背景にあるものとされている。この四隅突出型墳丘墓は、三次盆地発祥といわれており、この四隅突出型墳丘墓もまた、日本海沿岸との関わりを示しているといわ

律令制時代の三次郡衙跡から鉄の道具を製作した鍛冶工房と考えられる奈良時代の掘立柱建物跡が見つかっている。また、三次盆地には現在、約3000基の古墳が発見されている。これは、広島県内にある古墳の3分の1以上がこの三次盆地にあり、全国的にも有数の古墳密集地域として知られている。三次市内のいくつかの古墳から鉄滓や鉄塊が出土しており、住居の一部からは鉄滓や鍛冶炉、砥石も数多く発掘され、鉄製品の生産にもかかわっていたことがわかる。

第5節 中世の三次

中世において、重要な人物となるのが、三吉氏である。この三吉氏は、建久3(1192)年に備後国三吉(現在の三次)に地頭職を得て、比叡尾山城を築いた。その後、比叡尾山城に城を移す天正19(1591)までこの比叡尾山を拠点としている。三次の北西部(三次市三次町・十日市町・志和地町・作木町・布野町・君田町)を支配していた。また、比叡尾山の麓では、市もたち、現在でも中世の定期市の市日の名残を残す地名が比叡尾山の麓に残っている。また、比叡尾山の麓、畠敷で行われた五日市は、三次町の比叡山に城を移すのと、ほとんど同時期である16世紀後半に三次

町に移された。この新しい五日市の成立とほぼ同時期に馬洗川左岸の自然堤防上に十日市町が、それよりやや遅れて、17世紀前半に内町が成立し、この五日市町、十日市町、内町の3つを合わせて、三次三カ町あるいは、三次町と総称されるようになった。

第6節 近世の三次

慶長5(1600)年、関ヶ原の戦いの結果、福島正則が安芸・備後両国498000石の大名に封じられた。慶長6(1601)年春、広島城へ入った福島正則は、外敵の侵入を防ぎ、中世、広島を支配していた毛利氏やその支配下にあった旧勢力の影響力を押さえて自らの支配体制を貫徹することが最初の課題だった。そこで国境地帯の要所要所に一族重臣を配置して固めるため、出雲国へ通じる要衝の地である三次へ尾関正勝を配した。しかし、福島正則は、元和3(1617)年の洪水で破壊された広島城の石垣の修復を、幕府に対して正式の手続きをとらないまま行ったことが、武家諸法度違反とされ、翌年信濃国川中島(長野県)に20000石、越後国魚沼に25000石を与え、信濃国へ蟄居させた。

福島正則の事実上改易後、広島藩は浅野長晟の支配となった。寛永9(1632)年広島藩初代藩主長晟が47歳で急死したあと、跡目はその子光晟が継ぎ、その兄長治に5万石を分知独立させた。本藩を弟の光晟が継いだのは、彼が長晟の正室の子で、兄長治は側室の子であったからである。また、19歳の長治を分家独立させたのは、光晟がまだ16歳と若かったため、光晟の相談役・補佐役という役目を担うという幕府の意向によるものであった。三次藩は、三次・恵蘇両軍を中心に、瀬戸内海沿岸部の草津(広島市)・忠海(竹原市)・吉和(尾道市)、また高田郡上甲立(高田郡甲田町)や世羅郡賀茂村(世羅郡世羅町)などが飛び地として三次藩領に含まれた。これは、大阪市場などへの荷物出しの便や三次からそれらの港への中継地として選ばれたものである。また、本藩が幕府から拝領した領地の中で成立させた内分家としての支藩もあったが、三次藩は將軍から直接所領分与の朱印状によって正式に領地が与えられ、本藩からは独立した分家大名であった。そのため、幕

府が課した諸公役も普通の大名なりに勤めなければならなかったが、広島本藩への依存度は極めて強かった。

三次藩は、財政面で窮迫していた。その理由として、3つ挙げられている。1つは、藩の主な収入が年貢米と現物であり、その徴収には一定の限度があったのに対して、支出が貨幣経済の発達に伴って年々際限なく増えていったことである。つまり、収入は変わらないにもかかわらず、支出が増えていくことによって、貯蓄が減っていったということになる。2つ目は、家臣団の増加である。三次藩成立当初は約50人の家臣に過ぎなかったが、3代藩主長澄の頃になると、行政も繁雑化し、約300人と増加した。これにより、長治の時代には50000石のうち家臣の知行地が藩領の29%に過ぎなかったが、長澄の時代になると50%と増加し、藩財政を圧迫した。3つ目は、幕府に対する支出である。都市文化の影響を受けて次第に派手になった江戸屋敷への支出や、ほとんど毎年と言ってよいほど幕府から課せられる公役への負担があった。このように、年々支出が増加するのに対して、大規模な自然災害が相次いで藩収入が減り、三次藩は財政破綻に苦しんだ。

また、それに加え、三次浅野家は代々子孫に恵まれなかった。長治は実子が9人いたが、成人まで成長したのが、赤穂藩主浅野長矩に嫁いだ阿久利姫だけで、あとはみな、16歳以下の幼少期に死去している。そのため、2代藩主、また2代藩主も子宝に恵まれなかったため、3代藩主も広島本藩から養子を迎えて、その子を藩主にしている。3代藩主長澄も計7人の子供がいたがすべて9歳以下で幼くして死去している。そのため、3代藩主長澄が死去した後、幕府に年齢をごまかして8歳の長経を藩主に据えたが、16歳以下の末期養子を認めないとして、広島本藩へ吸収合併されることになった。しかし、その後、広島本藩主浅野吉長の意向で、幕府からの朱印状が与えられない非公式の内分家として三次藩を復活させたが、藩主が死去したことにより、享保4(1719)年、三次藩は名実ともに廃絶され、広島本藩に合併された。

三次藩廃絶後、旧家臣はしばらく三次に在住したが、宝暦8(1758)年に広島へ移住し、武家屋敷

『稲生物怪録』と三次

は家持ち町人へ1人1反3歩ずつ払い下げられ畠となり、明和3(1766)年には藩政を司っていた御館も外圍いを残して取り崩された。平太郎の屋敷で怪異が起こったのは、三次藩が廃絶した30年後の寛延2(1749)年のことである。つまり、三次藩はなくなったにもかかわらず、まだ三次藩の家臣団が三次に残っている時に怪異は起こったといえる

第7節 三次藩城下町

三次藩は、三次町を中心に城下町を形成していた。初代藩主浅野長治は、舌状に伸びる三次の町全体を城郭とし、三方を流れる川を天然の堀とした藩主も家臣も町人も一つの城郭の中で住む総郭型の城下町を形成した。つまり、三次藩城下町は北に比熊山が位置し、そして、東に西城川、南に馬洗川、西に江の川が流れる自然の要塞の形を成して

いた。

第8節 交通

三次は水陸交通の要衝である。江戸時代には、三次に宿駅が設けられた。寛永10(1633)年の幕府の派遣した第一回の巡見視の領内巡察を契機として、広島藩は交通制度を画期的に整備した。この領内巡察とは、第3代将軍徳川家光が地方の事情を知る為に関東を除く全国を6地域に分け、各地域へ派遣したのが始まりである。この寛延10年に広島藩はこの使節を受け入れるため、各地へ奉行を派遣して道路や交通施設の整備に努めた。広島藩で最も重要な往還が山陽筋を東西に結ぶ西国街道で、それに次いで、石見路、出雲路、備中路など他国へ通じる脇街道がある。三次はこれらの脇街道の結節点の一つとなっており、とくに雲石路が中国地方で最も重要な陰陽連絡路で三次は

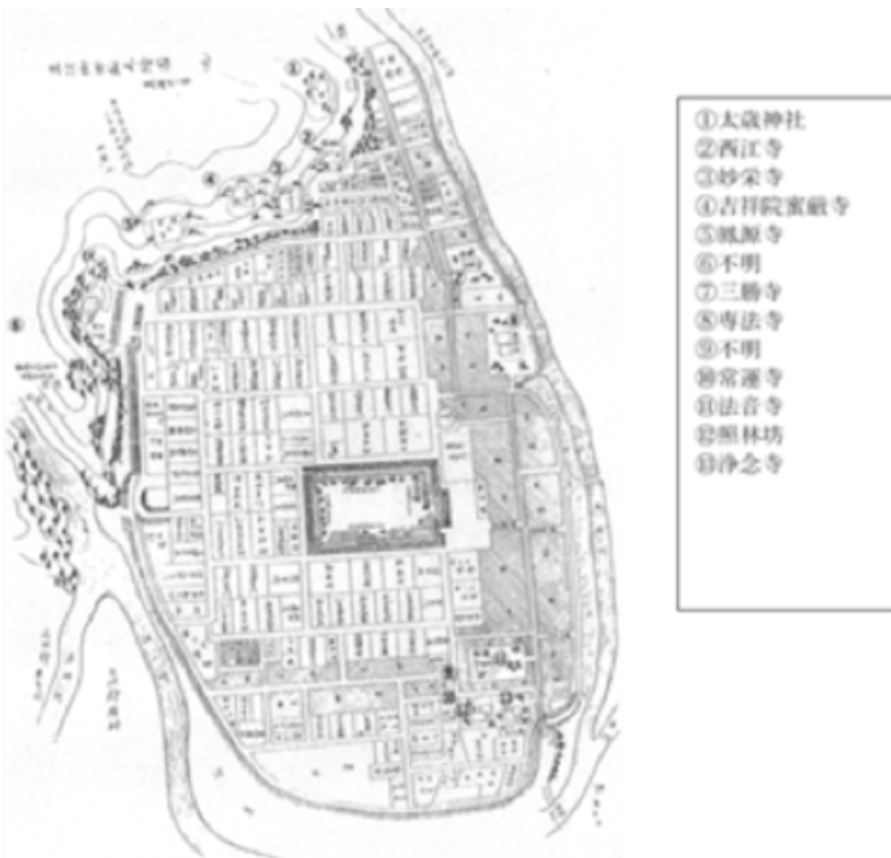


図5 三次御曲輪之絵図

(三次市史編集委員会『三次市史Ⅰ』p509を参照し、筆者一部加筆)

交通上からも重要な位置を占めていた。つまり、三次は陸上交通においていくつもの街道が交差する場所となっていた。



図6 近世の交通路
(三次市史編集委員会『三次市史Ⅰ』p633)

また、三次には西城川、馬洗川、江の川、神野瀬川と4つの川が流れ、また、西城川と馬洗川は合流して江の川となっていく。そのため、水運においても三次は交通の要衝であったことがうかがえる。また、江の川は石見国江津に流れ着き日本海に注がれることから、容易に山陰地方と交易をすることができた。しかし、江の川流域において、遺跡の分布から古代は山間を結ぶ陸上交通が主で、中世のころに江の川の水運がようやく開かれている。近世になると、抜け荷対策として、津留になっている。

第9節 比熊山

比熊山は、平太郎が登り、百物語をした山である。この比熊山は、比高170mの山で、三吉氏が、現在鳳源寺がある場所に館を構えたとされている。山上には一般的に「千畳敷」と呼ばれる、本丸跡の平場があり、ここで平太郎は百物語をしたといわれている。その脇地に三次若狭守、つまり三吉氏の塚があったとされ、『三次実録物語』では、塚に触れたものは即死、指を指したものは乱心したり、吐血したりするといわれている。そのため、この塚を「たたなり岩」とも言われている。また、柏本では、塚の背後に「天狗杉」と名づけられた大杉があり、この大杉に触れたものはたちまちたたりにあったといわれている。杉本好伸は、『改

訂 妖怪いま蘇る』の比熊山の紹介の部分でこの『三次実録物語』と柏本のちがいについて、「〈柏本〉系作品はいわば素朴な自然への畏怖が大きく占有していることになろうし、後者『三次実録物語』は人間的な色彩が色濃くなっているといえるだろう。」(杉本好伸 2013)と言っている。

比熊山には、神籠石があり、この神籠石とたたなり岩が同一視されている場合が多い。また、この比熊山南麓には、鳳源寺、西江寺、吉祥院、妙栄寺と寺院が密集しており、寺町を形成していると思われる。



図7 比熊山(筆者撮影)

第10節 神社・仏閣

以下、比熊山南麓に位置している寺社を紹介する。

● 鳳源寺(図5 [5])

鳳源寺は、中世の領主・三吉氏の館跡に建ち、臨濟宗妙心寺派の寺院である。この寺院は、近世に成立した三次支藩初代藩主浅野長治が父・長晟および先祖代々の菩提を弔うため寛永10(1633)年に創建された。この鳳源寺の境内には、浅野長治が長晟の7回忌にあたり建立した神道碑や、刃傷事件で有名な播磨国赤穂藩主浅野長矩の正室・阿久利姫(後の瑤泉院)の遺髪塔がある。



図8 鳳源寺本堂（筆者撮影）



図9 西江寺（筆者撮影）

● 西江寺（図5 [②]）

西江寺は、比熊山東南麓にあり、臨済宗妙心寺派の寺院である。天平宝字年間（757～765）に比叡尾山麓にあり、もとは天台宗の寺院だった。薬師如来を本尊とし、医王山高源護国寺と称していた。

中世、三吉氏菩提寺として再建し、禅宗に改めた。その後、三吉氏が本拠を比叡尾山から寺戸に移動したとき、天正年間（1573～1592）に一時三次郡石原村（現三次市町）に移り、清岩寺と改称したが、三吉氏が比熊山へ城を移した時、この寺も城内に移転した。

近世に入り、福島正則が広島県の政権を握っていた時、三次地方を支配した尾関正勝は、高源寺を菩提寺として西江寺と改め、尾関山城付近の現在の位置に移した。このように、西江寺は中世を中心として、三吉氏と尾関正勝の菩提寺となっていた。

柏本において、上田治部右衛門が西江寺の和尚に祈禱を頼みに行ったり、香炉・卓・薬師如来の御影を借りに行っている。また、『三次実録物語』では、上田治部右衛門は自ら魔除の札を書き四方の柱に貼りつけたが、のちに西江寺の和尚が来て柱の札に誤りがあるといって訂正紙を貼る、という話がある。この2つから見て、当時西江寺が妖怪を退治するというような性格をしていたことが読み取れるのではないだろうか。

● 吉祥院密厳寺（図5 [④]）

吉祥院密厳寺は、比熊山南麓に位置し、真言宗の寺院である。開基については、承和元年に創建したといわれているが確証はないと『双三郡誌』に記されている。もともとは、比熊山南麓一帯を占める広大な寺院であったが、福島正則の時に寺領の大半を削られ、さらに、寛永年間（1624～1644）に浅野長治はこの寺の寺地を割いて鳳源寺・妙栄寺を建立した。また、中世から近世をとおして吉祥院は祈禱所となっていた。



図10 吉祥院密厳寺（筆者撮影）

● 妙栄寺（図5 [③]）

妙栄寺は、比熊山南麓に位置し、日蓮宗の寺院である。浅野長治が慶安3（1650）年に鳳源寺近くに浅野長治の母・寿正院のために建立した寺院である。この寺院には、平太郎の父・武左衛門や親族の墓が現存する。



図11 妙栄寺（筆者撮影）

● 太歳神社（図5〔①〕）

太歳神社は、比熊山東麓に位置し、祭神を木花開耶姫命・天津彦々大瓊々杵尊、大山祇尊としている。大同3（808）年に出雲国神門郡青柳郷吹上島（現島根県簸川郡）から勧請された。三吉氏の崇敬を受け、家臣上里越後が祝師として奉仕したという。毎年6月30日には夏越の大祓として、輪くぐり祭、つまり茅の輪くぐりが行われる。これは、「蘇民将来説話」に由来されるものといわれ、約300年前から行われている無病息災を祈願する伝統行事である。また、渡御祭も行われることから、祇園信仰との深いつながりがあるように思える。また、比熊山内に神籠石がある事から、比熊山、もしくは神籠石は太歳神社のご神体と思われる。



図12 太歳神社（筆者撮影）

第4章 『稻生物怪録』と三次

第1節 たたら製鉄と三次

① たたら製鉄とは

たたら製鉄とは、古代から近世にかけて発展した製鉄方法である。おもに砂鉄を原料として砂鉄を溶かすために、炉に空気を吹き込む踏鞴（たたら）を使用していたことからたたら製鉄と呼ばれている。

② たたら製鉄における製鉄過程

[1] 原料の採取

鉄の原料は、塊状の鉄鉱石、もしくは砂鉄である。砂鉄の採取場所が川・浜・山に分けられることから、場所ごとに採取方法が異なる。

川砂鉄は、まず川底の砂をかき集め、流れに対して直交する土手状の高まりにし、水流に小さな渦を作る。軽い砂は舞い上がり、重い砂鉄は川底に残るので、それを鋤ですくい取り、流れにまかせて揺り動かし鋤の中に砂鉄のみを残す。そのまま、砂鉄を川船に集めて、さらに河原に据えられた小鉄舟へと移して精選する。

浜砂鉄は、海岸で集めた砂鉄を含んだ鉄を小鉄舟に入れ、水杓で水を打ちかけると砂は流れていき、砂鉄は残るのでそれから採取される。

山砂鉄は、鉄穴流しで採取される。鉄穴流しは、砂鉄を含んだ山の一角を切り崩し、雨や雪解け水を利用して谷川に土砂を流しこみ、沈殿した砂鉄をすくいあげる採取方法である。この採取方法は洪水などの災害を招くことから、広島藩でも寛永5(1628)年に太田川での鉄穴流しを禁止している。このように、鉄穴流しによる被害対策を1620年～1680年代以降に講じられていることから、すでに17世紀初頭では普及していたと考えることができる。この鉄穴流しは、江の川流域においても幅広く行われていた。

[2] 炭焼き

炭は、製鉄のときにたたらでつかう大炭、製鉄後に錬鉄を製造するときにつかう小炭がある。大炭は、炭窯に生木をつめて焼き、マツ・クリ・マキの太材が良いとされる。1回のたたらの操業で使う炭は、4.5tから15tにもなり、最大で1回7.5t

『稲生物怪録』と三次

焼き上げる炭窯もあった。小炭は、細かい枝材を平地に積み重ねて火をつけ、その後、柴や笹をかぶせて蒸し焼きにし、最後に土をかぶせて火をけして作っていた。また、マツ・クリ・トチなどの枝木が良いとされる。

こういった炭は、かさばり運びにくく、砂鉄は運びやすかったため、炭を手に入れやすい山中にたたらはあった。

[3] 製鉄炉を築く

製鉄炉は操業するたびに壊して、中にできた鉄を取り出す必要があったため、その都度新しく作っていた。製鉄炉は粘土に砂を混ぜたものを積み上げて作っていた。

[4] たたらの操業（鉄の精錬）

出来上がった炉に大炭をくべ、火を入れ、鞆を踏んで炉内に風を送り、炉内の温度を上げていき、十分に炉内の温度が上がったら、砂鉄を入れ始める。砂鉄と大炭を交互に入れて、操業中、できた銑⁽¹⁰⁾や炉内にたまった鉄滓を炉の外に流れ出て、炉内に鉤⁽¹¹⁾が残る。この鉤を操業後、炉を崩し取り出すのだ。

炉内の温度を上げる役割を担っていた鞆は、効率よく炉内に風を送るため、近世になると天秤鞆が発明された。この天秤鞆は、のように炉を挟んで鞆を作ったもので、小さな労力で、大きな風力を得られるため、番子⁽¹²⁾の負担を軽減した。

[5] 精錬された鉄を割鉄・鋼に加工

銑は、大鍛冶屋で炭素含有量を下げて、割鉄⁽¹³⁾に加工された。また、鉤は細かく割り、品質や大きさごとに分け、鋼に加工された。

[6] 割鉄・鋼を鍛造・铸造

割鉄・鋼は鍛造し、物によっては焼入れを施して製品にし、主に釘、鎌、斧などに加工される。銑は、羽釜や鍋などの铸造品となる。

③ たたら製鉄労働者に対する認識

鉄生産を生業とする人たちの生活圏、「山内」が形成されていた。こういった労働者を「たたら者」と呼ばれ、たたら者は木炭がとれる山から山

へ渡り歩いていた。そのため、たたら者は家も耕地も持っておらず、村の人たちから差別を受けていた。

こうした差別とは言えないが、たたら者に対する畏怖が表れている妖怪がイッポンダタラである。倉本四朗は、『妖怪の肖像—稲生武太夫冒険絵巻一』において、『稲生物怪録』で7月1日（図13、図14）に現れた髭手の大男をイッポンダタラの眷属としており、イッポンダタラは鍛冶職で職業病をわずらった人をあらしていると指摘している。それは、イッポンダタラが通常、一眼一足で描かれていることに由来する。たたら製鉄は、炉に火を入れて、鉄を精錬するまで3～4昼夜かかる。その間、番子は鞆を踏み続けなければならない。図15は、日本山海名物図会にある鉄踏鞆の図である。近世になると、天秤鞆ができ、両足を使って鞆を踏むようになったが、それ以前はこの図15のように鞆の両端をシーソーのように交互に踏んで炉に風を送っていた。この場合、番子は片足だけを酷使することになる。その結果、片足が不自由になってしまう。また、砂鉄を炉の中に入れる村下は、炎の色などを見ながら炉内の状態を把握し砂鉄を入れおり、そのとき片目だけを開けて火を見ていた。これにより、片目だけを酷使し、片目だけが不自由になってしまう。このように、片目片足が不自由になった姿を一眼一足の鍛冶神としてあらわしている、と倉本氏は指摘している⁽¹⁴⁾。



図13 鉄踏鞆
(平瀬徹斎『日本山海名物図会』 p48～49より)

このイッポンダタラの例を見るうえでも、たたら者に対する畏怖が見られる。

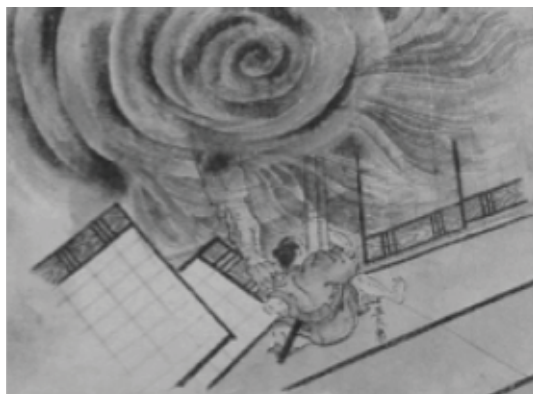


図14 『稻亭物怪録』7月1日の怪異（筆者撮影）



図15 『三十日之月』7月1日の怪異（筆者撮影）

④ たたら製鉄と三次との関係性

中国地方一帯は、良質な砂鉄の産地であることから、特に斐伊川や江の川の上流一帯でたたら製鉄が盛んだった。三次市内のいくつかの古墳から、鉄を鍛造した時に出てくる鉄滓や鍛造炉、砥石など数多く発掘されており、三次市内においても製鉄が行われていた。また、律令時代になると、鉄を調として納めていたことを示す木簡が出土している。三次市の中では作木村（現・三次市作木町）、布野村（現・三次市布野町）、君田村（現・三次市君田町）に多く鉄滓が出土しており、製鉄が行われていたことがわかる。ここで、興味深いのは、布野村と君田村は三次藩城下町の北に位置している。つまり、比熊山が山内とそうでない地域との境界線に位置していることがわかる。境界は、神聖な場所として見られ、そこに市が立ち、都市ができる。こうした都市にはしばしば、怪異が起こる。三次町もまた、山内とそうでない地域との境界であり、そこに市が立ち、近世に三次藩城下町ができたと考えることができる。そして、三次町

の中でも山内に接する比熊山付近で怪異が起こると三次の人々は考えたのだ。

第2節 寺町と三次藩城下町

「第三章 三次の概要」において述べたように、比熊山南麓において寺町を形成している。加賀・大聖寺藩城下町は、山の麓で要害地⁽¹⁵⁾ともなる所に寺が散在しており、また、金沢城下町においても四方を寺院群で固めており、寺院を建立し寺町を形成することによって、防御を意識している⁽¹⁶⁾。こういった事例から、比熊山南麓は三次藩城下町の要害地となっており、三次藩城下町の寺町形成は外敵からの防御の意味が込められていることがわかる。つまり、比熊山は三次藩城下町において重要な地と考えることができる。そのため、比熊山は三次の人々にとって警戒すべき場所であり、怪異が起こる場所であったと言える。

第3節 水陸交通路の要衝である三次

三次藩城下町は雲石路、石見路、備中路が通過する交通の要衝であった。佐々木高弘⁽¹⁷⁾は、かつて様々な厄災をもたらす鬼や妖怪は古代の主要な街道でもてなし、それ以上の侵攻を諷め、京都へ入らないようにした。そこで行われたのが「道饗祭」である。つまり、この「道饗祭」は京都へ侵攻していく鬼や妖怪をもてなすために行われた。そして、「道饗祭」は、国境近くの道路が複数交差する衢で行われた。三次藩城下町は、出雲、石見、備中に通じる道路が交差しているため、このように「道饗祭」が行われた衢の性格を有しているといえる。

このやってくる鬼や妖怪をとどめていた場所として、太歳神社が考えられる。「第三章 三次の概要」の「第十節 神社・仏閣」で述べたように、太歳神社では夏越の大祓が行われており、祇園信仰と深いつながりがある。このことから、太歳神社が山陰からやってくる鬼や妖怪を留める役割を持っていたと考えることができる。また、太歳神社が出雲へ通じる街道の入り口に位置していることから山陰からやってくるものに対して警戒していることがわかる。それは、かつて比熊山に山城が築かれていたことからわかる。つまり、山城を築くことによって物理的に山陰へと侵攻してく

るものをとどめ、太歳神社を街道の入り口に配置することによって精神的に侵攻してくる鬼や妖怪を留めていたと考えられる。そして、このように侵攻してくるものを留めていた場所に妖怪は現れるのだ。

また、三次には馬洗川、西城川、神之瀬川、江の川の4つの大きな川が流れており、三次藩城下町周辺で馬洗川と西城川、可愛川が合流し江の川になる。すべての川が舟運に使われているが、近世になるとこの4つの川の中で唯一、山陰に流れていく江の川が津留となっていた。これは、抜け荷などの違反行為に対する対策であった。そのため、主に舟運は現在の広島県内を中心として行われていた。しかし、実際に江の川を使った舟運は行われており、川もまた複数交差しているのが三次である。

以上のことから、三次の人々は山陰に対して警戒をしており、それが山陰へ通じる街道付近に妖怪を出現させていると考えられる。

おわりに

『稲生物怪録』は、様々な分野から研究されてきているが、諸本が多いことから内容に関する研究はあまりされてこなかった。そのため、『稲生物怪録』の内容に踏み込み、『稲生物怪録』の怪異はなぜ三次で起こったのかを明らかにすることを本論では目的としていた。そこで、内容の分析から天井からの怪異が多く、また、それ以外も怪異が起こる場所が屋内、もしくは敷地との境界と思われる場所にほとんどの怪異が起こっていることが分かった。また、山内とそうでない場所、との境界に三次藩城下町が位置していること、柏本において怪異が起こるきっかけとなった比熊山の南麓で寺町が形成されていたこと、水陸交通において衝的性格を有していること、この3つのことが分かった。以上のことから、『稲生物怪録』と三次との関係性が示すことができるのではないだろうか。この研究が、『稲生物怪録』の研究において、新しい切り口を示すことができたと考えている。

注 釈

- (1) 杉本好伸「稲生物怪録について」広島県立歴史民俗資料館『平成16(2004)年度開館25周年記念特別企画展 稲生物怪録と妖怪の世界—みよしの妖怪絵巻—』広島県立歴史民俗資料館 2004 pp13～20
- (2) 荒俣宏『平田篤胤が解く 稲生物怪録』角川書店 2003
- (3) 杉本好伸「稲生家の『系図』—事実と虚構—」三次市教育委員会『改訂版妖怪いま蘇る—〈稲生物怪録〉の研究』三次市教育委員会 2013 pp16～20
- (4) 倉本四朗『妖怪の肖像—稲生武太夫冒険絵巻—』平凡社 2000
- (5) (1) 同上 pp13～20より参照
- (6) 柏正甫は、ここに自叙をつけて、書き留めている。
- (7) 以下、堀田家本と称す
- (8) 小宮山楓軒『楓軒偶記』日本随筆大成編集部『日本随筆大成〈第二期〉19』1975年 p11より参照
- (9) 繁原史「『稲生物怪録』成立考」1995 常葉大学短期大学部『常葉国文』常葉大学短期大学部 1995より参照
- (10) 炭素含有量が多く、低い温度で溶ける鉄のことである。主に鉄鑄物に使われた。
- (11) 炭素含有量が少なく、溶けにくい鉄のことである。主に鍛造製品を作る際に使われる。
- (12) 鞆を踏む人
- (13) 炭素含有量が少ない軟鉄材で、釘などを作るときに使用された。
- (14) (4) 同上 pp29～33より参照
- (15) 深井甚三「北陸における近世城下町の形成についての素描」都市史研究会『年報 都市史研究2 城下町の類型』山川出版社 1994 p22より参照
- (16) 佐々木高弘『都市空間における神話的特性の変容過程に関する歴史地理学的研究』京都学園大学 2015 pp334～337より参照
- (17) (16) 同上 pp365～389より参照

引用文献

1. 三次市史編集委員会『三次市史Ⅰ』三次市 2004 pp526～527
 2. 繁原央「『稲生物怪録』成立考」1995 常葉大学短期大学部『常葉国文』常葉大学短期大学部 1995 p70
 3. 吉田麻子「『稲生物怪録』の諸本と平田篤胤『稲生物怪録』の成立」1998 p386／p 397
 4. 知切光歳『圖聚 天狗列伝 西日本編』岩政企画 1977 p 382
 5. 小川白山『蕉齋筆記』早川純三郎『百家隨筆 第三』国書刊行會 1918 p245
 6. 山本陽子「『さかさまの幽霊』再考一屋根の上の異界一」『明星大学研究紀要 人文学部・日本文化学科』明星大学日野校 2013 p151
 7. 杉本好伸「物語の舞台」三次市教育委員会『改訂版妖怪いま蘇る一〈稲生物怪録〉の研究一』2013 p9
- 秀雄 1980
 - ・谷川健一『稲生物怪録絵巻 江戸妖怪図録』小学館 1994
 - ・中国建設弘済会『江の川何でも事典』小管交通省中国地方整備局 2007
 - ・豊田武『流域をたどる歴史六 〈中国・四国編〉』ぎょうせい 1979
 - ・広島県『広島県史 民俗編』広島県 1978
 - ・広島県立歴史民俗資料館『平成 25 年度秋の特別企画展 江の川大図鑑』2013
 - ・三次地方史研究会『三次の歴史』菁文社 1985
 - ・三次地方史研究会『〈ものがたり〉三次の歴史』菁文社 1998
 - ・三次市教育委員会『三次市歴史民俗資料調査報告 第十集 妖怪 いま蘇る一「稲生武太夫 妖怪絵巻」の研究一』菁文社 1996
 - ・広島県立歴史民俗資料館所蔵『稲亭物怪録』
 - ・日野市郷土資料館所蔵『三十日之月』

参考文献

- ※注・引用文献に記載された文献は省略している
- ・「江の川」編集委員会『江の川』『江の川』編集委員会 1992
 - ・貞方昇『中国地方における鉄穴流しによる地形環境変貌』溪水社 1996
 - ・下中邦彦『日本歴史地名大系三五巻 広島県の地名』平凡社 1982
 - ・島根県立古代出雲歴史博物館『島根県立古代出雲歴史博物館企画展 たたら製鉄と近代の幕開け』島根県立古代出雲歴史博物館 2011
 - ・杉本好伸『稲生物怪録絵巻集成』国書刊行會 2004
 - ・杉本好伸「絵巻『三十日之月』（日野市郷土資料館所蔵）について一〈稲生物怪録〉関連絵巻一」広島近世文学研究会『鯉城往来 第十三号』広島大学文学部久保田啓一研究室 2010
 - ・鈴木瑞穂『イラストで見る はるか昔の鉄を追って～「鉄の歴史」探偵団がゆく～』電気書院 2008
 - ・住田秀雄『三次町の民俗一歴史と民族一』住田